

報告第 25 号

小城郷土史研究会からの提言書について

このことについて、別紙のとおり報告する。

平成 30 年 8 月 23 日提出

小城市教育委員会 教育長 大野 敬一郎

報告理由

平成 30 年 7 月 17 日付けで小城郷土史研究会から提言書の提出を受けたため報告する。

～ 生活の中の“ディスカバー小城”～
小城市民が郷土の歴史を共有するための提言書



平成 30 年 7 月 17 日
小城郷土史研究会

目 次

1. はじめに	1
2. 提 言	2
3. 具体的な4つの提案	3
4. 当会の基本姿勢	4

1. はじめに

小城市は佐賀県のほぼ中央に位置し、北に天山を頂き南に豊饒な平野と有明海が広がる、自然環境に恵まれた地域です。人々は弥生時代から農耕集落を営み、また鎌倉時代には下総から下向した千葉氏が、江戸時代には藩主となった鍋島氏が、そこに現在の小城市の礎となる町を築き、豊かな文化の花を咲かせました。美しい景観に囲まれ、いたる所に古社寺・史跡などが点在し、有形無形の文化財が残される小城を、「九州の小京都」、あるいは「九州の鎌倉」と呼ぶ声も聞こえて来ます。

しかし一方で時代は大きく変化し、地方自治体を取り巻く環境は厳しさを増しています。長引く不況に少子高齢化や過疎化の進行、それらによる市街地の空洞化や地域コミュニティの喪失、そして住民意識の多様化といった時代の波は、否応無く市民の生活を直撃し、市政運営に大きな影響を及ぼしています。いまや市と市民は共に力を合わせ、自らの創意と工夫によって町づくりを推進し、個性豊かで快適に暮らせる地域社会を創出して行かなければなりません。

近年、小城市では中心市街地の道路拡幅や「ゆめぶらっと小城」の開設など、近代化に向けたハード面の整備が着々と進んでいます。またイベントなどの各種文化事業や、「小城どこでんミュージアム」の制定など、市民に向けた歴史・文化広報も盛んに行われています。小城市が進める豊かな町づくりは、やがて大きく花や実を結ぶことが期待されます。

こうした小城の未来を担うのは、むろん子供や若年層の世代です。また他地域からの転入者も、新しい市民として小城の一翼となってくれるはずです。新陳代謝が明日を約束するのは、都市にも人間にも当てはまる真理なのかも知れません。

小城郷土史研究会はこの度、発足から五十周年を迎えた2017年を一つの節目と捉え、こうした小城の町づくりに向けた提言をさせて頂くことに致しました。私たちは郷土が育てて来た歴史や伝統文化を、若く新しい市民たちに伝え、共有したいと考えています。

なぜなら、彼らが郷土の歴史や文化について知ることは、自らのアイデンティティを知ることであり、彼らが今後、個性豊かで快適に暮らせる地域社会を創るには、アイデンティティの確認が重要となるからです。

小城の未来——それは過疎化に悩む没個性的な地方都市ではなく、市民が先人から受継いだ歴史や伝統と共生する、魅力ある文化都市でなければなりません。そのためにこそ若く新しい市民たちに、郷土とは何かを知って欲しいと私たちは考えます。

彼らが自分たちの住む町の歴史と文化を共有し、アイデンティティを確認し、心から郷土に誇りを持つこと——それは結果として、美しい「歴史都市・小城」の未来の町づくりに繋がるはずです。それはまた当会の信念であり、願いでもあります。ぜひ、本提案書を最後までご一読下さいますよう、お願い申し上げます。

2. 提言

小城とは何か——？ この問いに即座に答えられる市民は、そう多くはないでしょう。人は自分の足元は、意外に見えないものです。

しかしこの問いは、市民自身のアイデンティティへの問いでもあります。自分が生まれ、育ち、暮す町が、いったいどんな特徴を持ち他所とはどう違うのか。そうした疑問に真摯に向き合い、わが町の意外な歴史や伝統・文化を発見したとき、人は自分のアイデンティティを確認するのかも知れません。その“目覚め”は必ずや市民に自信を与え、郷土への誇りと愛情を喚起するはずで、小城の町づくりの原点は、そこにあるべきだと私たちは考えます。

小城郷土史研究会は、こうした「小城とは何か？」の答えを市民に考えて貰うため、以下のように提言させていただきます。

■「地方の時代」に向けた心の備えを

「地方の時代」と言われて久しい日本ですが、近年は情報通信の目覚ましい発達に加え、さらに九州新幹線の開通やインバウンドの増加といったプラス要素が見込まれ、小城を取り巻く環境は大きく変わりつつあります。「地方の時代」の真価が問われるのは、これからののかも知れません。市と市民が今後、対外的に小城をアピールして行くためには、常に「小城とは何か？」を考え、確かな心の備えをする必要があります。

■「歴史都市・小城」を明確なアピールポイントに

小城——それは、鎌倉時代に下総から下向して来た千葉氏と、その跡を受継いだ鍋島氏によって築かれた、重層した歴史と文化を持つ希有な「歴史都市」です。美しい自然と融合した数々の古社寺や、現代に受継がれる有形無形の文化財は、小城を「九州の小京都」や「九州の鎌倉」の名に恥じないものになっています。小城は町割りそのものが、ひとつの文化財と言っても過言ではありません。故に「歴史都市・小城」を、市の明確なアピールポイントとして打ち出すべきだと考えます。

■自信と郷土愛を小城のソフトパワーとして

自分の足元のこうした豊かな歴史や文化に、市民一人ひとりが気づき、その価値を正しく認識するとき、そこに新たな自信と郷土愛が芽生えることでしょう。自信は発信力を喚起し、郷土愛は伝統の尊重へと繋がり、結果として小城市の強力なソフトパワーとなるはずで、ハードとソフトの両輪が、市の発展を支えることは言うまでもありません。今こそ小城市の未来のため、市民による歴史・文化の自覚と共有が必要だと考えます。

■身近な生活レベルでの歴史発見を

上記の考えに基づき、私たちはここで「身近な生活レベルでの歴史発見」をコンセプトとした、実現可能に重点を置いたアプローチからの、いくつかのアイデアを提示させていただきます。一過性のイベントやセミナーでもなければ、むろん巨額の費用を前提としたものでもない。普段の生活の中から郷土の歴史を発見する——それがこの提案の要点です。「小城とは何か？」の答えは、そこから市民自身が見付けてくれるものと確信します。

3. 具体的な4つの提案

本提言書がいう「身近な生活レベルでの歴史発見」とは何か——？

ここでは上記のコンセプトに基づき、実現可能に重点を置いたアプローチから、以下に具体的な4つの案を提示させていただきます。これらは小城市民が普段の生活の中から自然に、郷土の歴史や文化を感じ取れるよう考案したもので、巨額の費用を必要とするハードウェアの設置等とは一線を画すものです。

●提案そのⅠ〈歴史ある通りに愛称を付ける〉

小城の歴史ある通りを文化遺産と捉え、それぞれに伝統に基づいた愛称を付けることをご提案します。それにより市民が日常生活の中で、自然に歴史を体感できるようになります。

●提案そのⅡ〈町の小さなミュージアム構想〉

公共施設の一角や空家などを利用した、小城市各地域の歴史・文化を紹介する簡易型ミニ資料館の開設をご提案します。それぞれの館はネットワークで結ばれ、相互補完しながら日常的に地域情報を発信します。

●提案そのⅢ〈市民版『小城の歴史』の発行〉

市民版『小城の歴史(仮称)』の発行をご提案します。当会会報の記事等を一般向けに書き直し、市民が定期的に郷土史と親しめるようにします。市報誌の一角に掲載、または別紙による同時配布とします。

●提案そのⅣ〈学校における郷土史教育の充実〉

次代を担う青少年に向けて、『小城歴史読本』の活用をご提案します。学校現場における郷土史教育などにも、当会が積極的に協力致します。

4. 当会の基本姿勢

小城郷土史研究会は昭和41年の発足以来、今日までに五十年の歩みを重ねています。僅か数人でスタートした会はその間、会報の発行や史跡探訪、研究発表会の開催など地道に活動の輪を広げ、成果を積み上げて参りました。今では会員の数も増え、発表会の席には多くの参加者が詰めかけるようになりました。

小城の歴史は調べるほどに奥深さを増し、その深淵に迫ることは、私たちの喜びであり楽しみでもあります。この町が「歴史都市」の名に相応しいことを、私たちは折りに触れ実感しています。

しかし、こうした喜びや楽しみを独占することは、私たちの本意ではありません。なぜなら小城の歴史や伝統・文化は本来、先人たちが遺してくれた遺産であり、相続人は全ての市民のはずだからです。当会はかねがね、この喜びや楽しみをより多くの人々と共有し、これまでの研究成果を市と市民に還元して、小城の町づくりに貢献したいと考えて来ました。

今回この提言書を作成するにあたり、私たちは昨年から何度も議論を重ねて来ました。そこには様々な紆余曲折もありましたが、結果としてたどり着いたのは、先人たちの遺産を未来へ繋ぐという結論です。

失ってからでは遅いのです。「歴史都市・小城」を風化させてはならない——そのためにも当会は、喜んで情報を公開し、市や市民に協力したいと考えています。今回ご提案させて頂いた4つの具体案実現のため、当会の会員がそれぞれの得意分野で腕を振るう心構えも出来ています。

私たちの研究成果が市民に受継がれ、小城の未来の町づくりに活かされれば、これに勝る喜びはありません。